

オンライン実心実学読書会 第13回
2022年8月27日

濱野靖一郎 『「天下の大勢」の政治思想史
- 頼山陽から丸山眞男への航跡 - 』 (筑摩書房、2022年)

関西学院大学法学研究科研究員

田中 豊

目次

第1章：丸山眞男の「追加」

第2章：頼山陽の「決断」

第3章：阿部正弘の「発明」

第4章：堀田正睦の「非常」

第5章：勝海舟の「憤懣」

第6章：木戸孝允の「涙」

第7章：徳富蘇峰の「将来」

第8章：原敬の「順応」



本書の問題意識

正当化の論理としての「天下」ないし「世界」の「大勢」

「世の中の状況はこのように流れていく、それにわれわれも乗っていかなければならない。そこに成功はあるのだ」という論理（26頁）

近世から近現代にかけての「天下の大勢」の意味の変遷

いかに形成され、正当化の言説となったのか？

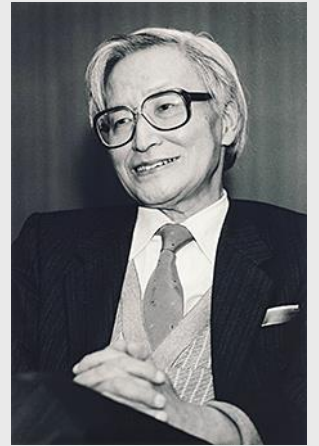
第1章：丸山眞男の「追加」

「古層」として示された「つぎつぎなりゆくいきほひ」

丸山：「勢」に「時間の経過」という概念が含意する

→ 妥当ではない。むしろ問題とされるべきは、**「時間の経過」が「勢」**

（「天下の大勢」）に必須となったその過程



丸山眞男（1914 - 1996）

第1章：丸山眞男の「追加」

儒学（朱子学）の用例

朱熹は、「天下大勢」を「現在の状況」と言い換える

→ 「どういった状況に進むのが必然か」という意味は考慮されない。

あくまでも**現状認識**の謂い（56頁）。

第1章：丸山眞男の「追加」

新井白石『読史余論』

「本朝天下の大勢、九変して武家の代となり、武家の代また五変して当代に及ぶ総論」

→ 「天下の大勢」は「一たび変じ」ることで異なる状況になる

「天下の大勢」は、ある時期・範囲の状況を整理した、**静的な概念**
(朱子学者らしい理解)



新井白石(1657-1725)

第2章：頼山陽の「決断」

丸山：「運動量」（モメンタム）としての「天下の大勢」

→ 頼山陽の「勢」が嚆矢

「天下の分合・治乱・安危する所以のものは、勢なり」（『通議』）

動的でとどまることのないものとして「勢」

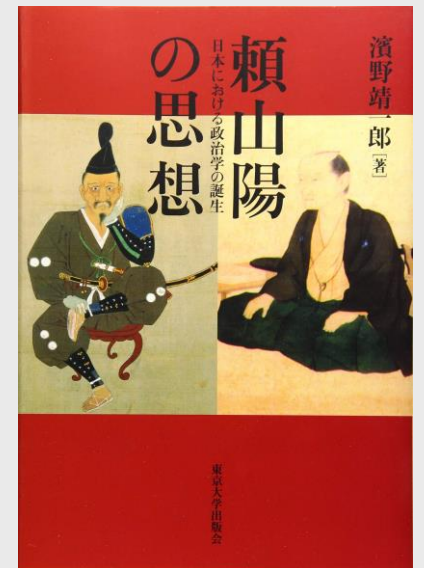
第2章：頼山陽の「決断」

「勢」に乗るのではなく、「勢」を認識した上でそれを制御しようとする主体的な姿勢が大事（86頁）

「君」の役目としての「勢」の制御

主体的能動的にその変化を制御していくこと

→ 頼山陽の政治学における課題



第3章：阿部正弘の「発明」

幕末・開国期をめぐる山陽への評価と彼の著作の流布への検討

『日本政記』完成の立役者：関藤藤陰

「**決断力に欠ける指導者**」としての阿部正弘

↔ 「**決断の君主たりうる存在**」としての徳川齊昭

頼山陽の政治理論に鑑みた結果としての為政者評



阿部正弘(1819-1857)

第4章：堀田正睦の「非常」

阿部正弘のように頼山陽の弟子を配下に置かなかった。

しかし、堀田もまた「天下の大勢」のよき理解者

例) 日本が欧米と戦争すれば「勝算」はない

→ 戦争それ自体における日本の敗北を明確に認める



堀田正睦 (1810 - 1864)

第4章：堀田正睦の「非常」

ではどうすればよいのか？

「鎖国」を「祖宗の法」として「理」とみなすのではなく、

利益を第一に優先すべき！

→ 「理」ではなく「時勢」の観点から政治を論じなければ、

国事は誤る

第5章：勝海舟の「憤懣」

勝海舟は、一体何に「怒って」いるのか？

大政奉還、王政復古の大号令の直後に提出された「憤言一書」

→ 「天下の大権」が「一正」に帰すべし

しかし、「私」に趨る輩が跋扈しており、今後どうなるか分からない状態にある



勝海舟 (1823 - 1899)

第5章：勝海舟の「憤懣」

何より、「俊傑」が存在しない大名を集めて国難に対処しようとしても、
かえって逆効果（大名・幕閣への不信）

御公儀の役人が「天下の大勢」を理解しなかったゆえに、徳川政権は瓦解した
海舟の「勢」は山陽に近い≠ 朱熹・白石

徳川政権の「勢」（なりゆき）は、もはや瓦解を回避できない

第6章：木戸孝允の「涙」

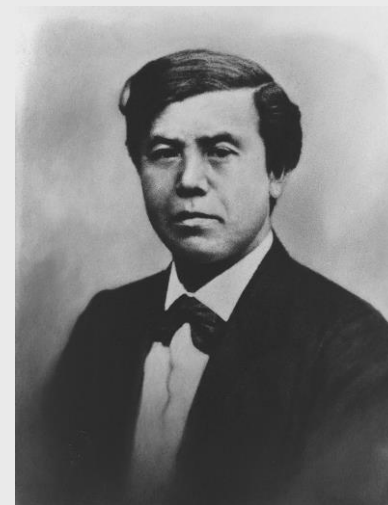
倒幕側の山陽受容：木戸孝允

「天下の形勢」は「千変万化」する

しかし、多くの人々は「宇内の大勢」について知らない

それは「公論」においても同様

木戸の「公論」は「大義名分」と「条理」を兼ねそろえたもの（236頁）



木戸孝允（1833 - 1877）

第6章：木戸孝允の「涙」

「御一新の御一新たる所以」は、「皇国」を維持すること

これが「宇内の大勢である！」・・・しかし人々は気づかない

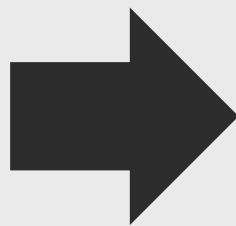
→ 版籍奉還をはじめとする政治的問題は、「時勢」と「公議」に集約

「勢」と「理」が等価なものとして明治日本はすすんでいく（255頁）

第7章：徳富蘇峰の「将来」

民撰議院設立建白書

- ・ 有司専制に対する批判
- ・ 人民を進歩させる手段
- ・ 租税からくる権利



「勢」として議院の設立は必要

第7章：徳富蘇峰の「将来」

社会進化論と「大勢」を融合した徳富蘇峰

「社会の運動」を占うなら「社会の大勢」を審らかにしなくてはならない（蘇峰もまた山陽の理論を継受）

「学問」「教育」が「世界」を変えるのではない。

自らが「学問」「教育」を変える！

「天下の大勢」を動かすことで「将来」は明るい



徳富蘇峰 (1863 - 1957)

第8章：原敬の「順応」

為政者、権力から距離をとっていた人々における「天下の大勢」

- ・ 高所から「大勢」を操作するよりも、「大勢」のなかでいかに「自己本位」とするか（夏目漱石）
 - ・ 「勢」の限極としての「資本家制度」、新たな「新果」としての「社会主義」（幸徳秋水）
- 「進化」としての「天下の大勢」

第8章：原敬の「順応」

吉野作造の場合

「自己の議論に説得力をあたえるための修辞」としての「大勢」「時勢」
(飯田泰三)

「立憲政治を行う」ことは「実に世界の大勢にして今更反抗」できない
(「憲政の本義」)

→ 「修辞」よりも「真理」としての「大勢」

第8章：原敬の「順応」

原敬の場合

山陽の愛読者、『通義』の影響大

為政者は「勢の赴く」先を察して、

「予め処理」しなければならない（「大勢を知るは官民の急務」）

→ 国会開設の勅諭は、「日本の大勢」の「赴く所」を定めたもの



原敬（1856 - 1921）

むすびに一時運ノ趨ク所

頼山陽により息を吹き込まれた「大勢」が、「流されていく」言葉へ主体的な姿勢が薄れていく過程をみてきた本書
→ その究極としての「終戦の詔書」（玉音放送）

世界ノ大勢、亦我ニ利アラス

むすびに一時運ノ趨ク所

朕ハ時運ノ趨ク所堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

「心を立て」たり、「道を立て」たり、「絶学を継」ぐこと（張横渠）
は言及されない

→ 「時運ノ趨ク所」で艱難辛苦に堪え「太平ヲ開」く

コメント

① なにゆえ「(天下の) 大勢」なのか？

② 中国政治思想史における「(天下の) 大勢」(あるいは頼山陽の東アジア思想史への影響)

コメント① なにゆえ「(天下の) 大勢」なのか？

著者はどういった経緯で、日本政治思想史において「(天下の) 大勢」に注目するに至ったのか？

丸山の「古層論」に対する批判？

頼山陽（前著『頼山陽の思想』）からの示唆？

コメント② 中国政治思想史における「（天下の）大勢」

例えば（恣意的な引用ながら）、康有為は『大同書』において「**大勢**の趨くところ、将来の至る所は、必ず大同に訖りて而る後已むものあらん」と述べている。

「大勢」の言説正当化は東アジア共通の現象なのか？

コメント② 頼山陽の東アジア思想史への影響

中国思想史における「勢」は、前著『頼山陽の思想』で詳細に論じられている（中国思想史から山陽への影響についても）

逆に、山陽思想の東アジアへのインパクトはあったのか？

近代中国、朝鮮半島への影響など。